日本における聞一多

―― 井上思外雄と小畑薫良 ――

鈴　木　義　昭

キーワード
聞一多と日本・井上思外雄との邂逅・小畑薫良『李白詩集』

一　はじめに

今年は，聞一多が昆明で国民党便衣隊の凶弾に斃れて48周年に当たる．今年の５月には，待望久しかった新しい『聞一多全集』が関係各位，特に武漢大学の聞一多研究室の先生方のご尽力で，立派に出版された．また，「聞一多学術学会」の理事長，黎智先生によれば，聞一多逝去50周年の1996年には，その一生がテレビドラマ化されるとのことである．聞一多は，中国の解放を見ずして，無念の涙を呑んだわけであるが，約半世紀を隔てた今日まで，その遺徳が脈々と受け継がれていることに対して，私としては，誠に以て羨望の念止み難いものがある．

さて，聞一多はアメリカに留学したということもあって，その人脈も彼の地には少なくなく，彼の地では修士論文などでも多くの学生が取り上げ，広く研究の対象になっていると言われる．しかし，残念ながら日本では，全集が出版されている作家，例えば，魯迅・郭沫若・郁達夫・老舎・茅盾・巴金などの諸作家に比べて，研究者の数は多くないというのが実情である．日本との直接の繋がりについても，魯迅・郭沫若・郁達夫の諸氏が日本に留学したのと比すれば，アメリカへの道すがら，神戸・清水・横浜・東京に数日間滞在しただけで，地縁的にも深い関係にあったとは言い

難い．詳しくは後述したいと思うが，聞一多が横浜・東京を見物した折，東京帝国大学の英文科２年生の学生，井上思外雄と知り合いになり，英詩を始めとして，広く詩について語り合ったのが今のところ確認し得る唯一の接触であった（湖北人民出版社『聞一多全集』魯 Vol. 12「書信・日記・付録」1994年１月以下，『全集』と略称する．聞一多たちが来日した時，留学生一行を案内したというガイドの松本某は除く）．

また，1926年には，英訳本として出版された小畑薫良 'THE WORKS OF LI・PO THE CHINESE POET'（『李白詩集』1922年 E. P. DUTTON & CO.）についての論評がある（『全集』Vol. 6「唐詩・上」所収「英訳李太白詩集」　原載は「北平晨報副刊」　以下，小畑のこの本を『李白詩集』と呼ぶ）．詩人，また新進気鋭の評論家として，聞一多は，小畑薫良の仕事を，外国語でなされた世界で第四番目の李白の紹介として，高く評価した．アメリカで，二十世紀の世界文学の動向をつぶさに見て来た聞一多ならではの幅広い観点が看取される．直接小畑薫良と会うことができたかどうかは，今一つ定かではないが．

本日は，聞一多によって，中国の人々の記憶に残ることとなった，この二人の日本人を巡って，井上思外雄の伝記などを併せて発表し，中国における聞一多研究者各位のご参考に供することができれば幸いである．

二　井上思外雄

聞一多は，アメリカからの，1922年７月29日付けの呉景超たち清華大学「清華文学社」同人たちへの手紙に，井上との出会いについて，以下のように書いている（『全集』Vol. 12「書信・日記・附録」）．関係部分を，煩を厭わず挙げておく．

> 這回來歡迎我們的有一位井上思外雄君可眞有趣了！這位先生是帝國大學二年級學英文文學的．我們在東京一個菜館吃飯時，偶爾談起來了，談的倒不錯．第二天他特來横濱到船上來找我，那知道詰朝已上東京去了．等我回來，他見我，便要看我的詩，但又不懂華文．後來他要我寄

幾首給他，他拿去請中國朋友幫他翻譯了，登在雜誌上．這還沒有什麼．他說他最喜歡 Yeats，忽然便無精打彩背起 Yeats 的詩來了；背完了，又講 Christina Rossetti 好，又背起伊的作品來了；這樣，自從我見着了他談了幾句話，他便搖頭晃腦，閉眼胸地背，滔滔不息地背，背到船快開了，才勉强地握了手，講了 good-bye 下去了．我并沒有請他背，他的 pronounciation 并不能使我聽着 enjoy. 但他似乎着了魔，非背不可的．我想他定有點神經病，便從他那語無倫次的談話也可看出．當他背詩時，何浩若在傍邊只笑，我心理想道："這才是一個'人'呢！瘋人同文人本來是同解的兩個名詞呢！"

と．井上思外雄は，明治33年（1901年），兵庫県に生まれる．大正10年（1921年），東京帝国大学英文科に入学し，同13年（1924年），卒業する．卒業論文は「Mysticism of Wordsworth」（「ワーズワースの神秘主義」）であった．卒業と同時に，京都の同志社大学（予科？）の教授として赴任し，昭和３年（1929年），第一高等学校（現在の東京大学教養学部）の教授になる．以後，昭和20年（1945年）まで，同高等学校の英語科の教授兼東大英文科講師を務める．田中準とともに「ポエチカ」創刊の発起人の一人となり，自らも詩をよくした．昭和20年８月，第一高等学校の職を辞し，中国大陸に渡り，撫順にて肺炎を得て死去．享年44歳であったと言う．

専門は言うまでもなく英詩であり，戯曲に対しても造詣が深かった．主な論文に，「現代英詩概論」（「英文学研究」［英文名は "THE STUDIES IN ENGLISH LITERATURE"］ Vol. 6 所収 1926年４月），「WALTER DE RAMARE の詩に就いて」（同 Vol. 7 所収 1927年４月），「EDITH SITWELL の技巧に就いて」（同 Vol. 11 No. 3 所収 1931年12月）などがある．この「英文学研究」は，元来は東京帝国大学英文科の紀要として出発した研究誌であったが，井上が投稿した時には，東北帝国大学，台北帝国大学，九州帝国大学系の専門誌となり，後には大学を問わない，全国的な規模を持つ学会誌となったものである．現在も，この名前で出版され続けていることは言うまでもない．当時，英文学者としての登竜門であり，ここに論文

を発表することがすなわち，学者としての身分証明にも繋がったと言っても過言ではない．

その他，主な訳書・編著として，『世界戯曲全集』（近代社刊）の第五巻，「英吉利古典・近代劇集」（1930年８月出版）では，ジョーンズの「うそつき連中」，ピネロの「タンカレーの後沿ひ」，「作者小傳及び解題」，同じく第七巻，「英吉利篇」（1928年３月出版）では，三浦道夫とともに，バリーの「メアリー・ロウズ」および「作者小傳及び解題」，同じく第八巻，「英吉利近代・現代劇集」（1929年８月出版）では，ホーソン「次の時代」，ハンキン「放蕩息子の歸宅」および「作者小傳及び解題」を執筆している．その後，1933年には，英詩のアンソロジー的な訳書『PRESENT−DAY ENGLISH POEMS』（開隆堂），訳注としては，ベネット『文學趣味』（成美堂　1938年），訳書に，ジェイムズ・マシュウ・バリー『メアリー・ロウズ』（弘文堂　1941年），著書に，『英米風物誌』（研究社　1942年９月後に，1946年８月に第二版が再版される），1944年には，火野葦平『麦と兵隊』の訳書『麦と兵隊 CORN AND SOLDIER』（研究社出版）がある．

以上のことからも，井上が若い時代から相当な人物であったことが了解されるであろう．ところで，井上は聞一多たちに，イェイツとロゼッティの詩をほとんど突然に朗唱し始めるわけであるが，彼が二人の詩人の詩を朗唱するのには理由がある．当時，日本ではこの二人の詩人が一種のブームだったのである．それは，「英語青年」の記事にもよく伺われる．「英語青年」は，英語に興味を持つ人々――アカデミズムから一般の向学心のある人々，さらには受験のテクニックを学ぼうとする学生・生徒をも含めた人々――にかなり愛読された雑誌であった．大正12年（1923年）の同誌には，竹友藻風の手で，クリスティナ・ロゼッティの伝記が連続して掲載されていた（Vol. 46, No. 8〜12）し，同年５月には，中村祐「クリスティーナ・ロゼッティの詩」（同誌 Vol. 49, No. 4），８月には，小日向是因「ロゼッティの “Sister Hellen” の研究」（Vol. 49, No. 9）などが掲載される．イェイツについては，大正13年（1924年）２月の Vol. 50, No. 9 にその

特集が組まれている．福原麟太郎「イェイツ評傳」，野口米次郎「イェイツに就いて」，矢野峰人「イェイツの藝術觀」，佐藤醇造「イェイツと晩餐を共にして」，本田益次郎「イェイツのシング推輓」，山宮允「イェイツの抒情小詩」，竹友藻風「イェイツの詩」，富田義助「夢にイェイツと語る」，岡倉由三郎「イェイツ作『狩人の唄』」などが掲載されるのである．井上は少なくとも，そうした日本の英文学界の動向を見定めていたということになろう．

聞一多は，呉景超たちへの手紙の中で，井上がイェイツとロゼッティの詩を朗唱している傍らで，それを聞いていた何浩若が笑いを浮かべていた，と書く．この部分だけでは，その笑いがどのような種類の笑いかは分からないが，好意からくるところのものであれば問題はない．しかし，もしそれが井上の“発音の悪さ”に対する嘲笑，延いてはその実力に対する軽視であったとするならば，何浩若が日本の学問の事情，すなわち，読むことを重視し，話すことを軽んじる傾向があったことを知らなかったことによるであろう．一方，聞一多が「他定有點神經病，便從他那語無倫次的談話也可看出」と言うのも，少々言い過ぎではないかと思うが，慧眼の持ち主ではあった．聞一多は，「井上思外雄君可眞有趣」，「談的倒很不錯」，「這才是一個眞‘人’呢！」，「瘋人同文人本來是同解的兩個名詞」と言い，同じく学問を志す者として，詩に対して興味を持つ者として，さらには詩の実作者として，互いに周波数が合ったものと思われる．井上に対する好意的な論調を読み取ることができるのである．対話をしているその当の二人には思いもよらなかったであろうが，井上も聞一多も今次の世界大戦の犠牲者となったのである．井上の犠牲というのは，彼の突然の大陸（撫順）での急性胸炎による“急死”を指す．

田中準は，「季刊英詩研究」創刊号（英詩研究社1948年１月）に「井上思外雄のこと」という一文を寄せて，哀悼の意を表している．掛け替えのない友人を失った田中の痛切極まりない心情が終わりの一部を読むだけで，読む者に十分に伝わってくるであろう．

けれども彼れは，だまつて行つてしまつたのである．一高をふりすてて，だまつて滿州に出かけてゆき，はかなくもそこで落命してしまつたのである．

と．井上が職を辞し，「滿州」に出掛けて行つた理由は，

あれほど寒さを恐れ，寒さをきらつてゐた彼れが，どうして滿州へなど出かけていつたのか，それをきいて，はじめは納得できないほどであつた．行くまへには，どうしたことか，それを言はなかつた．滿州の方が襲撃もなくかへつて安全だらうなどと人ごとのやうに言つてゐた彼れの言葉をあとで思ひおこしたりしたが，そのときには，すでに心をきめてゐたものにちがひなかった．

と書かれるように，友人にもはっきりしたものではなかった（はっきりとは言えなかった？）ようである．ただ，「襲撃もなくかへつて安全だらう」と言う井上に注目してみるならば，当時の日本軍国政府にとって，あまり好ましい人物ではなかった，つまり，不穏分子であったことが類推されよう．聞一多が国民党政府から「危険分子」として狙われていたことを思い合わせてみたい．彼の遺著とも目すべき『英米風物誌』の「はしがき」(1942年）には，

我々はよく一口に英米といふ．彼れらを同じ民主國の範疇に入れて考へる．彼れらを同じアングロ・サクソン人と思つてゐる．そして，彼れらの風俗習慣は大差ないものと考へて一向に疑ひを差し挾まない．彼れらの用ひる英語も大した區別をつけない．然し，彼れらの相違を仔細に見るならば容易に一律に論ずることの出來ないのを發見する．（後略）

と書かれる．彼の思想の一端――かなり自由主義的である――が伺えるであろう．現在のところ，まだはっきりとはしていないが，こうした自由主義的な思想が彼の晩年を圧迫したのではないかと考えられよう．前にも述べたように，彼は1944年，火野葦平の『麦と兵隊』を英訳する．『麦と兵隊』を戦時体制に協力する形を取った一種の「厭戦小説」と見るならば，これまた，彼の思想の在り方を証明するものの一つになるかも知れない．

なお，矢野貫一は『戦争文学辞典』「CORN AND SOLDIER」の項（1993年8月和泉書店）で，「おおむね原文に忠実な翻訳といってよい」としながら，護良親王という実名をそのまま訳出したり，中国人捕虜に対する叙述に工夫をしていると述べている．

戦争が終わった昭和20年10月26日付けの朝日新聞は，「講壇を追はれた教授達」という見出しを付けて，昭和12年以降，「赤教授」，「自由主義学者」という烙印を押されて，多くの大学人が教壇を去ったことに対する告発の記事を載せている．ここには，井上の名前はないが，当局の卑劣な弾圧がそうした教授たちに加えられ，右翼によるテロ事件も多く発生したことは，今日常識となっているわけである．

なお，ポエチカ同人であった井上と聞一多には，奇しくも同じ題名の詩がある．以下，それを対称的に挙げておくので，お読み戴きたい．細部はともかく，詩境に相通ずるものがあるように思われる．

たそがれ

しづかにたそがれの露はくだる，
丘のふもとの小さき村の
農家の屋根と林の上に．
ものなべて，家も木々も，
ほのぐらきうすむらさきの光のなかに，
いきづきいこひ，
——平和な天より滴りくだる．

仰げばたそがれの空たかく，
星はほのかにはためき光り，
鳥はねぐらに急ぎ帰る

あゝみはるかす杜のかなたに
ともしびのわが家あり．

黄昏

黄昏是一頭遲笨的黑牛，
一歩一歩的走下了西山；
不許把城門關鎖得太早，
總要等黑牛走進了城圈．
黄昏是一等神秘的黑牛，
不知他是那一界的神仙—
天天月亮要送他到城裏，
—早太陽又牽上了西山．

三　小畑薫良

小畑薫良は，明治21年（1888年），大阪府下の裕福な農家に生まれる．父親の小畑万治郎は，漢学者でもあった．「イロハよりも論語を先に注ぎこまれた」と言う．同39年（1906年），大阪茨木中学を卒業後，早稲田大学高等予科，文科に入学する．同40年，大学に進学するが，即座に退学してアメリカに渡る．ウイスコンシン，シカゴの両大学を卒業し，コロンビア大学大学院で中世英文学を修め，そのままアメリカに滞在する．1922年２月，大学院在学中のこの時期（『李白詩集』が出版された月でもある），ワシントン会議の通訳として活躍し，ニューヨークの日本総領事館に勤務する．その後，駐仏大使石井に招かれ，一年半ほどヨーロッパに遊学する．そして，1925年10月，小畑薫良は一度日本に帰国し，特命全権大使，日置益に随行して，「北京関税特別会議」に出席すべく，北京に赴く．この会議の主たる議題は，22年のワシントンで調印された「中国の関税に関する条約」に基づいた，中国の「関税自由化問題」であり，中国，日本，アメリカ，イギリス，フランスなど14カ国が参加した．この時期を境にして，列強諸国，とりわけ日本の対中国政策がより強固なものに変化していったことは言うまでもない．

さて，聞一多の小畑『李白詩集』は総じて評価が高い．前述した部分の直後と最後の一段を挙げておきたい．

> 這篇評論披露出來了，我希望小畑薫良先生這件慘淡經營的工作，在中國還要收到更普遍的注意，更正確的欣賞．書中雖然偶爾也短不了一些疏忽的破綻，但是大體上看起來，依然是一件很精密，很有價値的工作．如果還有些不能叫我們十分滿意的地方，那許是應該歸罪于英文和中文兩種文字的性質相差太遠了：而且我們應注意譯者是從第一種外國文字譯到第二種外國文字．打了這個折扣，再通盤計算起來，我們實在不能不佩服小畑薫良先生的毅力和手腕．

この後，小畑薫良訳の誤った所，改めたほうがいい部分を列挙する．そし

て，アーサー・ウェーレィとエミー・ロウレルの訳と比べてみても，遜色がないばかりか，それ以上の出来栄えであることを述べる．フィッツジェラルドの『ルバイヤット』翻訳でも，本国人にとっては不満があっても，英語の読者にとっては，問題にならないとする．要するに，最後の部分で，

> 小畑薫良先生譯的《李白詩集》在同類性質的譯本里，所占的位置很高了．再想起他是從第一種外國文字譯到第二種外國文字，那麼他的成績更有叫人欽佩的價値了．

と述べるように，外国人がそのまた外国語に翻訳したものとしては，敬服に値すると述べるのである．

ここでは，次の二点を考えてみなくてはならない．一つは，小畑と聞一多とは，直接会うことができたかどうか．また今一つは，小畑が聞一多の提言を受け入れたかどうか，である．聞一多の手紙などの記録には残っていないが，論文「英訳李太白詩」を発表したのが1926年６月のことであり，そこに「小畑薫良先生到了北京，更激動了我們于他譯的《李白詩集》的興趣」と書かれているからには，「北京会議」の終わった後，二人は会うチャンスがあったと見ることも可能であろう．ただ，もし，会えなかったとしても，小畑の来華を聞一多が知っていたことにはなるであろう．聞一多はこの年，アメリカから帰国し，夏休み明けからは北京の芸術専科学校に就職し，そこの教務長を務めていたからである．

前述のとおり，小畑薫良は1922年２月，ニューヨークで『李白詩集』を出版するわけであるが，この年の８月７日，聞一多はアメリカ大陸を横断して，シカゴ芸術学院に入学するため，シカゴに到着する．９月１日付けの梁実秋，呉景超に宛てた手紙によれば，聞一多は「我買了十幾本新書——都是關于文學的」と言う（『全集』Vol. 1 No. 12「書信・日記・附錄」）．これだけの記述では，何の本を買ったのか分らないが，同年の10月当時，彼の最初の詩集『紅燭』の篇名の一つとして，「李白之死」を想定していた．（後に最終稿を送る際に，《李白篇》に改められる）ことから考えて，もし，小畑薫良の『李白詩集』が書店の店頭に並べられていたなら

ば，それを買った可能性は高いであろう．小畑の「序」(Prefacc) には，

……Miss Lowell devotes her recent delightful volume, Fir-Flower tablets, largely to our poet, with a celection of eighty-five poems by her.

と書かれ，エミー・ロウエルの名前が挙げられる．聞一多がその8月28日に書いた英文の手紙（『全集』Vol. 12「書信・日記・附錄」所収「致親愛的朋友們」）によれば，アメリカ文学における「新運動」(“New Movement”) について触れた後，

New the foremost figures of this group of “new” poets are Robert Frost, Vachel Lindsay, Amy Lowell, Edgar Lee Masters, Carl Sandburg, Sara Teasdale, Harriet Monrou and an endless list of others no less than prominent.

と，フロスト，リンゼン，エミー，ロウレル，マスターズ，カール・サンドバーグ，テアドール，ハリエット・モンロウといった詩人たちの名前を挙げる．更には，

You may be interested to know that our literary insurgent Dr. Hu Shi's (八不主義) is not quite of his own invention either. I shall copy several article of the credo of the Imagists, a school of “new” poest of whom the greatest living woman poet, Miss Amy Lowell is the leader:

と言う．聞一多のエミー・ロウエルへの傾倒は尋常ではなく，彼女が死んだ時，次のような追悼文を「京報副刊」に寄せている（1925年7月1日同紙第195号）．

生于一八七四年二月九日，死于一九二五年五月十二日．她的死是美國文學界的大損失．她死了，中國文學與文化失了一個最有力同情者．

と．彼ら同人の詩の雑誌も彼女の拠った「ポエトリー」を参考にしようとした形跡があるほどである．すなわち，

雜誌内容余意寧缺勿濫，篇幅不妨少．體裁倣寄上之 Miss Harriet Monrou's《Poetry: A Magazine of Verse》，吾希望其功用亦與《Poetry》同．

とある（『全集』Vol. 12）．彼らの詩の雑誌が発行できるようになるのは，1926年４月になってからのことである．こういうことから考えてみて，私は，聞一多が小畑薫良の『李白詩集』を読んだ可能性は高いと考えるのであるが，如何であろうか．小畑は，この本を書くに当たって，後に中国哲学の大家となる馮友蘭の「valuable criticism and correction」を受けたと語っている．馮友蘭は，のちに清華学校の同僚となるわけであるが，留学生の仲間として，この本について話を聞いたことがあるかも知れないが，今は臆測の域を出ない．

小畑は，『李白詩集』の日本版（北星堂1935年再版　筆者が目を通したのはこの版である）の「序」で，

> I wish to thank my friends and reviewers who have kindly point out the errors and misprints in the NewYork and London editions, which are all corrected in this book.

と言っているからには，日本版にするに当たって，相当の手直しをしたものと考えられる．

なお，ここで注目されるのは，胡適主導の中国における「新文学運動」も，アメリカの「イマジスト・クリード」に負うところが多いとして，六カ条のクリードを挙げ，「Don't they smell something of Dr. Hu's slogan?」と言う（聞一多自身の「新詩」に与えた「クリード」の影響については，以前にも書いたことがあるので，ここでは省略する――拙論「聞一多と新詩」「早稲田大学文学研究科紀要」別冊 Vol. 3 1976年）

小畑薫良は，日本に帰ってから，その語学力を買われて，『英譯萬葉集』（日本学術振興会出版1940年　監修は市河三喜，外に石井白村も参加．ホジソンがインフォーマント・チェックをする）の作業に当たる．

小畑薫良は，昭和17年（1942年）には，大東亜省嘱託，同24年，外務省事務官（文書課），同26年，サンフランシスコ講和会議全権委員随行員を務め，同31年，外務省参与となる．その語学力を吉田茂首相に重用された．前記の二著の外，『源氏物語』の英訳もある，と言う．昭和46年七月没．享年は83歳であった．

四　おわりに

現在，日本では，1930年代との類似を言うことが多い．歴史の繰り返しであってはならないことは無論，その教訓を生かすのが我々現代を生きている人間の任務でもある．聞一多という人物の一生は，その意味で，非常に貴重である．彼の生きざまは，我々にそのあり方を語ってくれていると言ってよいであろう．十数年来，私が関心を持ち，論文を発表したりして，取り上げている所以である．本日の発表が，日本人がどのように考えていたか，いるかを知って戴く一助，延いては，日中の相互理解の一助になることができれば，これに過ぎたることはない．諸先生方のご教示を仰ぎたい．

（完）

本稿は，1994年12月19日，北京での聞一多国際学術シンポジウム大会で発表した原稿の日本語草稿に若干の手直しをしたものである．ただ，発表時の記録性を重んじ，最少限の加筆に止めた．